



いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。



2021年

クリスマスおめでとうございます

コロナ禍により、2020年は静かなクリスマスでした。それに続き、さらにひっそりと2021年は始まったのではないかと、臍気に記憶をまさぐっています。集まらず、出歩かず、ひたすら感染を避けました。年に1、2度の家族全員が集まるというささやかな祝い事が許されなかった年末年始でした。今年は感染者数が激減したせいか、すこし、穏やかな気持ちでアドベントを過ごしています。

日課となった早朝ウォーキングは、クリスマスの頃になれば、北に瞬く北斗七星を確認して歩き始め、東の空が虹色に明けゆく頃に帰路につきます。住宅地では庭先に丹精込めて作られた草木が季節ごとに花を咲かせて、私に微笑みかけます。カラスが縄張りを主張して叫びます。ひとりで歩いていても、生き生きと動き回る自然の中で、創造主のまなざしのもとに歩いています。

ガラパゴスと揶揄された携帯をやっとスマホに替えて、慣れないながらも、電話やメールを以前より頻繁に、密に、交わすようになりました。ビデオ通話ではモザイクもなく顔が映って慌てふためき、遠慮するものの、友人の生の声には親愛の思い、蜜の味があふれていて嬉しくなります。

ひとりの時間には「詩編」を読み、宿題かのように、感想文にまとめる作業を課しています。四苦八苦しながらも、大きな喜びも与えられています。仕事に家事に忙しく働いてきた主婦にとって、これほど贅沢な時間は今までなかったと思います。ひとりの時間もいいものです。

教会では通信手段を格段に上げて、印刷物を配送し、ネットで礼拝を同時配信しています。大変なご苦労に感謝しています。情報を得るために慣れ親しんだ手段であっても、オンライン礼拝には私はなかなか馴染めず、ヴァーチャルに味気無さを痛感します。一日も早く **見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。(詩編 133:1)** という思いが実現する日を願っています。



夫も大病を克服し、つつがなく毎日を過ごしていることを感謝しています。年齢とともに、友人、知人の病態、訃報を受けることが増し、辛くなり、人としての定めを思い知らされます。生かされている今を精一杯生きたいと願わずに



いられません。まだコロナ禍が続いています。世界全体ではおよそ530万人、日本ではおよそ1万7千人の人々が命を落としています。終息を祈るばかりです。私たちは老人の枠で早めにワクチン接種できて、安心感が持てて、少し動き始めました。夏、私は朝日カルチャーで「クリシタンの記憶をたどる」講座を受け、秋、夫婦で軽井沢に山々を、能登半島に日本海を見に出かけました。冬、中学時代からの親友夫婦と共に、湯河原温泉に出かけ、語らいつつ、散策、食事を楽しみました。

クリスマスには二年ぶりに「家庭クリスマス」を守りました。家族が守られていることを感謝し、揃って主イエスに従い、教会に連なり、何らかの奉仕ができるようにと、私は切に祈っています。そのために、家族を大切に、愛し、助け合いたいと願っています。今年もご馳走したくて、一生懸命七面鳥を焼いてみました。

